

スタンドポイント理論における反転テーゼのミニマル化のリスク
The risk of minimizing inversion thesis in standpoint theory

大橋一平

Abstract

In this paper, I will first summarize the recent debates surrounding feminist standpoint theory and confirm that the focus of these debates is mainly on the epistemic justification of the "inversion thesis". I will then indicate that standpoint theory in recent years has accepted the claims of the inversion thesis in a way that unduly weakens them in relation to empiricism. I argue that the tendency to 'minimize' the recent inversion thesis can significantly weaken, or even contradict, the methodological imperative of standpoint theory, that 'inquiry should start from a marginalized experience'. Finally, I show the need to distinguish between the concepts of epistemic privilege and epistemic advantage as a way of resolving the above problem.

(1) 研究テーマ

フェミニストスタンドポイント理論（以下 FSP）とは、端的にまとめるならば、社会において周縁化されている立場の知識主体が、社会的に特権的な立場を占める知識主体よりも、ある文脈においては、認識的に有利な立ち位置にある、という理論である。この FSP の主張は、一見して直観的である一方、FSP の内外において多くの論争を巻き起こしてきた。

本稿では、まずこの FSP をめぐる近年の論争を整理しつつ、その論争の焦点が主に「反転テーゼ」と呼ばれる主張の認識的正当化をめぐるなされていることを確認する。その上で、近年の FSP が反転テーゼの主張を経験主義との接続のなかで、過度に弱める仕方で受容している点を指摘する。そして筆者の主張として、近年の反転テーゼの「ミニマル化」という傾向が、「周縁化された立場から探究を開始する」という FSP の核ともいえる方法論的要請を著しく弱める、もしくはそれと対立する場合があることを論じ、その上で生じる認識的害を示す。最後に、上記の問題を解決するための方途として、認識的特権という概念と認識的利点の概念を区別する必要性を提案する。

(2) 研究の背景・先行研究

2-1. FSP の基本的アイデア

FSP は 1980 年代以来、フェミニスト認識論の内外で多くの論争を巻き起こしてきた。そしてスタンドポイント論者たちの間でも、スタンドポイント (1) とは何か、被抑圧的な立場の人々の認識的特権とは何かについての見解は様々である。とはいえ、近年のスタンドポイント論者が重要性を共有しているのは、伝統的な認識論においては非認識論的要素として無視されてきた、認識的主体のアイデンティティが認識論的に重要である (Toole 2023)、という点である。

以下では FSP の主張に見られる基本的な 4 つのテーゼを Tilton の整理を参考にしつつ確認する (Tilton 2024)。以下のテーゼ全てをスタンドポイント論者たちが同じ仕方で共有しているわけではないが、少なくとも FSP の主要な論点として共有されている。

1. 状況に置かれた知識テーゼ The Situated Knowledge Thesis

知識主体は社会的に位置付けられており、知識主体の社会的位置は、私たちが何を知ることができ、何を知識とみなすのか、どの様に知識を獲得するのかを形づくり、制限している。

2. 反転テーゼ The Inversion Thesis

「支配構造のもとに置かれ、その構造によって一貫して周縁へと追いやられ迫害されている人々が、実は、重要な点で認識的に特権的な位置にいることがある」 (Wylie 2004, 339)。例えば、周縁化されてきた人々は、特権的な立場にいる人々が気づかないエビデンスやエビデンスの使い方、また支配的でない仮説についてアクセス可能であるかもしれないし、それらを発見しようとする関心を有している。

3. 達成テーゼ The Achievement Thesis

周縁化された立場の人々が有するスタンドポイント、ないしそれに基づく認識的特権は、その社会的な立場にいることから自動的に与えられるものではなく、様々な状況のなかでの批判的奮闘を通じて獲得されるものである。

4. 方法論的要請 The Methodological Imperative

少なくともある知的探究は、周縁化された人々の立場から探究をはじめなければならない。なぜなら、周縁化された人々の生や経験は、より私たちの社会の構造についての正確な探究のための資源をもたらすからである。

これらの 4 つのテーゼはそれぞれ相互に関連している。達成テーゼにおいて、ある知識や探究が可能であるのは、特定のパースペクティブやスタンド

ポイントを獲得している(しようと目指している)人々によってのみである。そしてこの達成テーゼは、反転テーゼにおける認識的特権の根拠であると同時に、認識的特権をより高めるものでもある。なぜなら認識的特権は自動的に与えられるものではない点で達成テーゼはその条件であり、他方で周縁化された人々が自身の社会的-認識的な立場を既存の社会構造のなかで自己理解し、その社会構造のメカニズムを批判的に見る視点を獲得していこうとすることは、認識的特権を高めるからである。また、反転テーゼの認識的特権に関する主張は、探究の出発点を周縁化された人々の経験に定める方法論的要請の根拠である。

2-2. 反転テーゼに関する諸解釈

これら4つのテーゼのなかでもFSPにとって中核に位置しているとされ、もっとも議論がなされているのが反転テーゼとその認識的特権についてである。以下この反転テーゼについてのいくつかの解釈を概観していく。

まずHardingによる「強い客観性」の主張がある(Harding 1992)。Hardingは他のフェミニスト認識論者と同様に、正当化の文脈と発見の文脈を区別する伝統的な価値中立的な客観性理解を批判することで、強い客観性を提示する。強い客観性は、知識生産の過程において、その歴史的、社会的な背景、科学コミュニティの関心を検討に付すことで、研究に内在する構造的バイアスを発見していくことを求める(Harding 1992, 445)。

そして客観性を最大化していくためには、支配的な枠組みから周縁化された人々の経験から研究を始めなければならない。なぜなら特権的な立場にいる者が気づくことのない抑圧の構造について、批判的な観点をもたらし、コミュニティ内の批判性を高めるためである。周縁化されている者はコミュニティからの排除を不可避免的に生きざるを得ず、生延びるために抑圧的な構造について学んでいかなければならない認識的関心を有している。

上記のようなHardingの議論に対して多くの批判がなされてきた。例えば、ある社会的に位置づけられた視点がより優れていると判断するための具体的基準が提供されていないことや、反転テーゼを支持する証拠が示されていない点である(Rolin 2006, 125)。前者の批判は、「なぜ特定の周縁化された立場の人々に認識的特権があるのか」という問い、後者の批判は、「認識的特権を正当化する根拠とはなにか」という問いである。それゆえFSPの主な焦点はこの反転テーゼの認識的正当化の問題に集中している。

この批判に応答するため、近年のスタンダードポイント論者たちは、反転テーゼの主張をより経験的に正当化可能な仕方で弱める傾向にある。Wylieは、

Harding と同様に被抑圧的な人々の認識的利点を認めつつ、その認識的利点を非-基礎づけ主義的かつ非-本質主義的な仕方で示そうとする(Wylie 2004)。周縁化された立場にある知識主体に自動的に認識的な特権が与えられる、もしくはいかなる場合においても周縁化された主体の知識の認識的特権を基礎付けるような客観性が存在するという主張は、知識の歴史性や地域性といったものを超えた普遍的で確実な基礎を求める点で、経験的な正当化に耐えることができない。

Wylie が周縁化された者の認識的利点として検討するのは、「個々の具体的な認識的プロジェクトに対して、あるスタンディングポイントがいかなる認識的重要性をもつか」、という問題である(Wylie 2004, 344)。つまりあらゆる状況を超えた確固とした認識的特権の基礎を求めるのではなく、個別の状況ごとによどのような認識的利点⁽²⁾が発揮されうるのかについて経験的分析をすることが主張されている。Wylie は反転テーゼにおける認識的利点の主張を、文脈依存的で「偶然的」な、諸々の認識的特長の組み合わせの主張として理解する。Crasnow と Intemann が指摘しているように、Harding に対して、Wylie の立場は、FSP の主張を経験主義と両立可能なものとし、反転テーゼにおける認識的利点を個々の探求のケースに役立つ「一つの資源」とみなす傾向にある(Crasnow and Intemann 2024, 74)。

このような経験主義との接続をより進めている立場として Intemann による「フェミニストスタンディングポイント経験主義 feminist standpoint empiricism」がある(Intemann 2010)。Intemann は FSP とフェミニスト経験主義とを調停しつつ、FSP における認識的特権についての主張を、あるプロジェクトにおいて重要である特定の経験的証拠にアクセスできるか否かという地点にまで弱める。また Harding の被抑圧的な立場の認識的利点として捉えていた知識探求における政治的な関心の問題を、あくまでより幅広い多様な経験的証拠を得るための道具的に価値あるものとして位置付けている(Intemann 2010, 793-4)。

また近年の議論では、反転テーゼにとって、周縁化された社会的立場は「十分条件」でないだけでなく「必要条件」ですらないとする、反転テーゼの「ミニマル化」の傾向がある(Dror 2022, Toole 2023, Tilton 2024)。例えば Dror は従来の反転テーゼに対する「弱い反転テーゼ」として、周縁化されている立場の人々の認識的特権とその社会的立場との関係はあくまで傾向性があるに過ぎず、原則的にはいかなる社会的立場にも認識的特権は開かれているとする(Dror 2022, 624)。また Tilton は周縁化された立場の人々の経験が認識的に重要な要素を与えることは認め、そのことがスタンディングポイントを獲得す

るために有利である点を認めるが、周縁化された立場がスタンディングポイントの獲得にとって必要条件である点是否定する。スタンディングポイントの獲得は社会的に特権的な立場の人々も同様に目指すべきものである(Tilton 2024, 13)。

(3) 筆者の主張

本稿では上記のような近年の FSP の議論が、(1) 主に反転テーゼに集中し、方法論的要請との関係については明示的に議論の主題としていない点、そして(2) 反転テーゼのミニマル化の傾向に対して警鐘を鳴らす。それゆえ以下では反転テーゼのミニマル化のリスクを指摘するため、FSP の基本的アイデアの一つである「方法論的要請」との関係でその問題点を論じていく。本稿は反転テーゼのミニマル化の解釈の妥当性については立ち入らない。むしろ本論が扱うのは反転テーゼのミニマル化の議論が方法論的要請と切り離されて論じられている状況に起因する問題である。

FSP にとって周縁化された立場から研究を始めるという方法論的要請は前提でありつつ、核となる主張であり、反転テーゼは方法論的要請を根拠づけるための議論であるといえる⁽³⁾。それゆえ反転テーゼについての評価は方法論的要請との関係からなされる必要がある。反転テーゼのミニマル化の傾向は、方法論的要請との関係の下検討するならば、FSP 自体にとって非常に問題あるものとなりかねない。以下では、反転テーゼのミニマル化が、方法論的要請を著しく弱める場合と、もしくはそれと対立する場合について論じ、それらが引き起こす認識的害について示す。

まずミニマル化が方法論的要請を弱める場合である。反転テーゼのミニマル化によれば、周縁化された立場の認識的特権が認められるのは、特定のプロジェクトにとって「重要である」という条件のもとで評価された結果である。その際方法論的要請が機能するのは、周縁化された人々の経験がプロジェクトにとって関連がある限りで、どのような経験的証拠が得られるのか、どのような証拠に対する分析、解釈が可能かを評価する水準に制限されている。つまりそこでは周縁化された人々の認識的特権を評価するにあたり、無批判的に既存の経験的評価の基準(証拠の重要性や証言の信用性を判断する)が前提されている。したがって、研究プロジェクト自体の選択やリサーチクエスチョンを精査する段階、どのような経験がプロジェクトにとって重要であるかを判断する段階に関して、方法論的要請は機能しないことになる。

次にミニマル化が方法論的要請と対立する場合である。反転テーゼのミニマル化によれば、周縁化された社会的立場は、認識的特権にとって「十分条件」でないだけでなく「必要条件」ですらないとするのであった。方法論的

要請の根拠が認識的特権であり、その認識的特権を周縁化された立場に固有なものではないとするならば、認識的特権は経験的に検証される限りで認められるものとなる。それは認識的特権が認められるのはあくまで検証の結果であり、探究の開始点とはならないということである。そのことは方法論的要請を実質的に意義のないものとしてしまう。

このような反転テーゼのミニマル化と方法論的要請との衝突が引き起こしうる認識的害を二点挙げる。一点目は研究デザイン自体（仮説形成やリサーチクエスションの設定）を検討する際の議論の場への参加の条件が、当の研究プロジェクトにおいて既存の評価基準のもと重要であり、検証されうる認識的特権に制限される場合である。この場合、研究デザイン自体を形作っている既存の概念枠組みに内在している構造的偏見や抑圧的なステレオタイプを検知し、それらを是正していく段階への参加機会が著しく減ってしまう。

確かに Tilton(2024)や Toole(2023)が強調しているように、周縁化された立場に基づく認識的な利点は様々存在する。それゆえ、その立場ゆえにプロジェクトにおける重要性は認められるかもしれない。しかしそれが経験的に検証される限りで結果的にそのプロジェクト内で認められるものならば、特定のプロジェクトの指針に基づく限りでの優先性に制限される。しかし、FSPが元来問題としてきた、研究の始めから無視されてきた特定の集団のニーズや関心は、「それ自体」として評価されることも、尊重されることもない。それゆえ、既存の経験的评价基準（しばしば暗黙のものである）を無批判に採用する反転テーゼ解釈では、当の基準においてある知識が歴史的に周縁化されてきたという事実が見過ごされている⁽⁴⁾。したがってその基準において周縁化されてきた知識を適切に評価するための新たな価値創出の現場に、周縁化されてきた知識主体が主体的に参加することを、保証することができない。

また被抑圧的な主体の探究への参加を阻む第二の問題として、反転テーゼのミニマル化解釈が、当の知識主体の「認識的な」周縁化の歴史的過程を十分に考慮することなく、研究上利益の見込める認識的利点のみを論じている点がある。Collins が強調するように、FSP が特定の歴史的に周縁化されてきた集団の経験から議論を始めることは、その集団が自身を知識主体として認め、自身のニーズに適った知識を探究していくために、その集団を「エンパワメント」するという重要な役割をも担っている(Collins 2019, 139)。エンパワメントは、周縁化の結果掘り崩された、知識主体としての承認や自己信頼を回復するために重要である。自身のニーズに基づいた批判的関心を形成していく過程（スタンドポイントの獲得）において、知識主体としての承認や自己信頼はなくてはならない。このような承認や自己信頼を獲得してい

く過程を無視するならば、コミュニティのなかで知識の主体になることができただけでなく、単なる知識の対象として搾取される可能性がある。反転テーゼのミニマル化が方法論的要請と対立する場合、周縁化された立場の知識主体の探究コミュニティへの参加が優先されないどころか、必ずしも保証されないことになる。これは **FSP** それ自体にとって問題である。

(4) 今後の展望

上記の様な反転テーゼのミニマル化と方法論的要請との衝突を解決するためには、次の点を再考しなければならない。それは「認識的特権」と「認識的利点」の区別である。多くのスタンドポイント論者は両者を区別していないが、近年の論者は前者を社会的立場が必要条件ではない批判的議論を通してあらゆる人が獲得しうる「スタンドポイント」、後者を社会的立場に基づいたものとして区別している (Toole 2023)。

本稿では今後の展望として、個々のプロジェクト内で発揮されうる認識的利点に対して、周縁化された立場の認識的特権を「抑圧に気付くこととしての探究の出発点」と捉える方針を探っていく。客観的な探究がその探究内にある構造的偏見やバイアスに気付き、それらを是正していく試みであるならば、被抑圧者の経験が客観的な探究の出発点とされねばならないのは、その探究の共同体のなかで周縁化されてきたという経験それ自体であり、それは既存の概念枠組みでは自身の経験が「説明されえない」という気付きの経験だからである。既存の概念が自身の経験の説明には「不十分」、ないし「不適切」であるという基礎的な気付きの経験によって、共同体内での抑圧のメカニズムを探っていく関心やそれに基づいた既存の概念枠組みとは別様の枠組みを発展させていく協働的探究が可能になるといえよう。その意味でこの認識的特権の規定は個々のプロジェクトにおける認識的利点やスタンドポイントを獲得してくための基礎になりうる。このように認識的特権を定式化していくことは、近年の **FSP** において正面から扱われてこなかった、方法論的要請と反転テーゼとの関係を再考するための糸口となる。つまり反転テーゼは方法論的要請の単なる根拠なのか、それとも反転テーゼが十分に根拠づけられるために方法論的要請は必要とされるのか、といった問いである。

注釈

(1)本稿では「スタンドポイント **standpoint**」と「立場 **position**」という訳語を用いている。前者が批判的探求のなかで獲得されていくものであるのに対して、後者はすでに社会的に位置付けられているものである。

(2)論者によって「認識的特権 epistemic privilege」をもちいるか「認識的利点 epistemic advantage」をもちいるかは様々である。ただ傾向として「認識的利点」は個々のプロジェクト内で発揮される一種の「特徴」のように説明されるケースが多い。

(3)Harding は初期の著作から一貫して、FSP の核となる主張を、周縁化された経験から探究を開始することによる客観性の最大化としている (Harding 1992, 2015)。

(4)例えば精神医学において、既存の理論では評価できない当事者のニーズが無視されてきた事例については Friesen & Goldstein(2022)を参照。

(5) 参考文献

- Crasnow, S., & Intemann, K. (2024). *Feminist Epistemology and Philosophy of Science: An Introduction*. Taylor & Francis.
- Collins, P. H. (2019). *Intersectionality as Critical Social Theory*. Duke University Press. [パトリシア・ヒル・コリンズ『インターセクショナルリティの批判的社会理論』湯川やよい、松坂裕晃、佐原彩子、藤浪海訳、明石書店、2024年]
- Dror, L. (2022). Is there an epistemic advantage to being oppressed? *Nous*.
- Harding, S. (1992). RETHINKING STANDPOINT EPISTEMOLOGY: WHAT IS “STRONG OBJECTIVITY?” *The Centennial Review*, 36(3), 437–470.
- Harding, S. (2015). *Objectivity and Diversity*. University of Chicago Press.
- Intemann, K. (2010). 25 Years of Feminist Empiricism and Standpoint Theory: Where Are We Now? *Hypatia*, 25(4), 778–796.
- Rolin, K. (2006). The bias paradox in feminist standpoint epistemology. *Episteme* (Edinburgh), 3(1–2), 125–136.
- Tilton, E. C. R. (2024). “that’s above my paygrade”: Woke excuses for ignorance. *Philosophers’Imprint*, 24(1).
- Toole, B. (2023). Standpoint Epistemology and Epistemic Peerhood: A Defense of Epistemic Privilege. *Journal of the American Philosophical Association*, 1–18.
- Wylie, Alison (2004). Why standpoint matters. In Harding, S. (Ed.). (2004). *The feminist standpoint theory reader*. Routledge. 339-351. [「なぜスタンダードポイントが重要なのか」『分析フェミニズム基本論文集』木下、渡辺、飯塚、小草訳、238-274、慶應義塾大学出版会、2022]

Friesen, P., & Goldstein, J. (2022). Standpoint Theory and the Psy Sciences: Can Marginalization and Critical Engagement Lead to an Epistemic Advantage? *Hypatia*, 37(4), 659–687.

(上智大学)